

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

心も運ぶ"パンを焼く"動詞：
フィンランドのパンをめぐるって

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4543

心も運ぶ

パンを焼く動詞

8

フィンランド語

フィンランドの パンをめぐる

文化をめぐるキーワードというものがあ。日本の食文化のキーワードがご飯なら、フィンランドではさしずめパンということになる。日本人にとってご飯がそうであるように、フィンランド人にとって、パンは常に食卓に存在し、パン抜きで食事はありえない。それほどばかりではない。パンは生命をささえ、また生活の基盤であるという意味から、新築祝いには幸運をもたらすものとしてパンと塩を送るなど、信仰や儀礼においても象徴的存在で、それをめぐる慣習も多い。ことばには文化が反映するといわれるが、ここでは、フィンランド語とパン文化の例をもってみることにしたい。

国立民族学博物館教授

庄司博史

(しよじひろし)

Profile

1949年生まれ 大阪府出身
専門分野●言語学・言語政策論
著書●『事典 日本の多言語社会』(共編著)、『ことばの二〇世紀』(編著)、『多みんぞくニホン』(編著)、他

日本に「飯をかせぐ」という表現がある。これにまさに一致するのがフィンランドの「パンをかせぐ」という常とう句だ。ヨーロッパには一般的なこともかもしれないが、フィンランドにはパンをつかった諺も多い。「パンが男を道にとどめる」(生活が第一だから、人は無茶なこととはしないもの)、「生まれた子供はパンをもってくる」(いくら貧しくて子どもは勝手に育つ)など、メッセージはさまざまだが、パンを生きる糧の象徴ととらえる点では共通している。

小麦を原料とするパンの発祥が中近東だとすれば、ヨーロッパも最北に位置するフィンランドはパン文化圏の周縁地域にあるといえる。フィンランド

語でパンは一般にレイパ leipä というが、この語は、英語のローフ loaf やロシア語のフリエブ khleb にもつながる古いインドヨーロッパ語系の借用語である。おそらくパンとともに古代に取り入れられたことばが、このような言語表現に根付いた背景には、パンが実際の食生活において重要な位置を占めるようになったからに他ならない。

現在フィンランドには大きく分けて、原料に小麦を用いるパンとライ麦を用いるパンの二種類がある。前者は、イースト菌で膨らませた白くやわらかいパンで、日本で通常見られるパンに近いが、後者は乳酸菌をパンダネにもちいる、ちよつと酸味のある固くて黒褐色のパンだ。現在、小麦パンもライ麦パンもレイパと総称されるが、元来、レイパということばはもっぱらライ麦パンを指していて、形や混ぜ物、また焼き方により、その種類や呼び名も小麦パンをしのぐほどだ。ちなみにロシアのピロークに起源をもち、アジアの餃子や包子にもつながるパイ(ピーラッカ pirakka) の皮もフィンランドではライ麦生地からつくる。中部ヨーロッパか



穴あきライ麦パン。食事にパンは欠かせない(写真:筆者撮影)

らみてもはるか寒冷地域に位置する故、いつしかライ麦がパンの原料として小麦をしのぎ、ライ麦パンはフィンランドの味となったようだ。

このパンをフィンランド人は決して食卓から欠かさない。たとえジャガイモが肉料理とともに皿に盛られていようと、簡単にスパゲッティで食事を済ませるつもりであろう。

皿の片隅には必ず一切れのパンがおかれ、時折それをかじりつつ食事はすすむのである。

私にはなんとなく、鍋のあとおじやをたべ、ラーメンをすすりながらご飯を食べないと食事をした気分にならない。

日本人とよく似たところを感じるのだが、フィンランド人にとって、パンにはエネルギー源以上の精神的満腹感を与える役割があるようだ。

さて、パンを「焼く」という表現だが、フィンランド語には二つの動詞がある。パイスター *paistaa* とレイポア *leipoa* という動詞だ。レイポアは後で触れる

ことにするが、パイスターはパン焼きだけではなく、およそ日本語の「焼く」、「あぶる」、「炒める」、「いる」行為から、油をもちいた「揚げる」まで、食物に火を通す行為を広くカバーできる。焼く対象もパン、ケーキから魚、肉やじゃがいもまで可能で、調理方法も直火からフライパン、油なべ、オーブン料理にまでひろく使われる。要するに、水をもちいた、日本語の「たく」、「ゆでる」、「わかす」以外はパイスターで済むような感じである。ちなみに水気の多い調理法も、「沸騰させる」こと以外は、ケイッター *keitätä* 一語でほぼ表現できる。

調理用語の文化人類学では、日本語には「たく」、「ゆでる」、「煮る」、「ふかす」など水気を用いた調理表現が多く、英語にはフライ、ベイク、グリル、トースト、ローストなど水気の少ない調理が多いことから両者の食文化がしばしば対比されてきた。しかしフィンランド語は、パイスターとケイッターの二語でとりあえずカバーできてしまっている。調理用語の乏しさが食文化の乏しさに通じるかはさておき、数年前のオリンピック開催地をめ

ぐるパリとロンドンの論争を思い出す。その際、フランスのシラク大統領が、「イギリスの料理よりまずいのは、フィンランドぐらい」と口を滑らせた。これはフィンランド人の自尊心を大いに傷つけ、しばらく新聞紙面をにぎわせた。

そんなフィンランドの食文化の中でも、パンが特別な地位を与えられているのは確かだ。それは、先に挙げたもう一つの「焼く」動詞レイポアが、パンのみに与えられていることからうかがえる。それを示唆するおもしろい現象を紹介する。

日本発祥のパン焼き機はフィンランドでも結構普及したが、これは粉と水とイーストを入れておけば、勝手に生地をこね、焼き上げてくれる便利な機械だ。しかしこの行為をフィンランド人はレイポアと言いくらいという。レイポアは、やさしく手でこねたパン生地をオーブンでじっくり焼き上げるときしか使えないというのだ。レイポアには、心をこめるという意味も入っているのだろうか。とすればパンを食べる心を満たすというフィンランド人の心情も理解できそうな気がする。